

Dresstudy : 服飾研究

京都 : 京都服飾文化研究財団, 1982 -

1975 (昭和50) 年春、日本初の服飾展覧会「現代衣服の源流展」が京都国立近代美術館で開催された。同展は、「Vogue」誌の伝説的ファッションエディターだったダイアナ・ヴリーランドが、同誌を去った後に特別顧問に就任したニューヨークのメトロポリタン美術館で企画・開催した (1973年) もので、同展に「強い衝撃を受けた」三宅一生が、当時、京都商工会議所副会長だった (株) ワコールの塚本幸一に働きかけて日本展開催の運びとなったという。大きな反響を巻き起こし、入場者数も10万人を超え、京都国立近代美術館の記録を更新した。この衝撃は一過性のものにとどまらなかった。「服飾文化を研究する」という機運の「源流」となったのである。3年後の1978 (昭和53) 年に京都服飾文化研究財団 (KCI) が設立された。財団の目的は「服飾史の研究であり、それを基本としての新しい文化創造の研究であり、その過程において出来るだけ多くの人々に展覧会を通して勉強をして頂く事にある」と、本誌創刊号で塚本が述べている。

以後、服飾研究の根幹を実物資料に置いて「収蔵品の収集と研究の充足を図り、ハコを持たない」ユニークな服飾研究機関として着実に成長してきた。収蔵品は「最も規模の大きいファッションのプライベート・コレクション」とフランスの「Le Figaro」紙に評されるほどとなり、これらをベースにしたいくつもの服飾展を独自に企画・開催し、こうした既存の枠にとどまらない文化啓蒙活動は広く知られるところである。中でも「モードのジャポニスム展」は国内外から大きな評価を得て、京都を皮切りに (1994年)、パリ、東京、ロサンゼルス、ニュージーランド (2都市) を巡回した。

こうしたKCIの研究・広報活動の一翼を担うのが本誌である。本誌「Dresstudy : 服飾研究」は、1982 (昭和57) 年春の創刊以来、年2回、春と秋に刊行されている。編集主幹は、KCIチーフキュレーターで、現在はニューヨークの「Fashion theory」誌の編集委員も兼任する深井晃子である。独自の視点を切り口としたテーマを掲げ、ファッションにかかわる多岐にわたる研究論文やエッセイを取り上げてきた。さまざまな領域の執筆者からの寄稿によって、広い視野にたったファッションを再考し続けている。テーマは、おそらくKCIのその時期の最大関心テーマを取り上げているというこ



創刊号 (1982春) 表紙

となのだろう。開催中の、あるいは開催準備中の服飾展につながることが多い。

また、「服飾博物館のあり方」も本誌の基調となる問題意識だった。巻頭提言としての「(服飾博物館論)、そして巻末の「世界の服飾博物館」である。前者は、カトリーヌ・ジョワン=ディエートル(パリ市立衣装博物館チーフキュレーター)の「今日のモード博物館」(29号)や五十嵐耕一((財)日本博物館協会専務理事)の「ハンズ・オン」(37号)など、今日の博物館の課題と展望を示してきた。「世界の服飾美術館」は第2号から37号まで続き、メトロポリタン美術館コスチューム・インスティテュート(2号)からユトレヒト中央美術館(37号)まで36の「世界各国の衣装関係の美術館、研究所等」が紹介された。服飾研究の最も重要な実物資料や文献がどこにどのように収集・所蔵されているのかが概観できる貴重な資料となっている。本学大学院ではこれを基礎資料にした修士論文が2004年度に1編提出されている。

2000(平成12)年秋の38号からページ数を増加させるとともにカラー化の進展などビジュアル面も大幅に改訂された。上述した「世界の服飾博物館」は終わったが、テーマ性が一段と明確化しより充実した研究発表の場となっている。

2003(平成15)年秋から、論考の公募を開始した。「1982年に創刊した『DRESSSTUDY』は、既存の領域を超えた学際的研究としてファッションを捉え、これまでさまざまな分野の第一線で活躍する研究者から幅広く寄稿していただきました。社会とは、その時代のさまざまな事象がお互いに作用反作用を繰り返すことで形成されるものであり、ファッションはそういった動きつづける社会を映し出す鏡といえるからです。この視点は、20世紀後半に活発となった学問領域再編の波、そして、諸分野から出された綿密なファッション研究を追い風に、近年、多くの人々に認知されるようになりました。現在、多くの大学の学部や大学院で、ファッションをテーマとした授業が行なわれ、学生たちもさまざまな手法を取り入れながら研究を進めており、見逃すことのできない成果が生まれて

います。……『DRESSSTUDY』が、諸分野からの活発な投稿と、優秀な人材の交流の場となることを強く願っています」とある。

創刊当初から服飾分野にとどまらず、他分野からの寄稿を積極的に掲載してきた。「外部との交感を常に意識すること、これはファッション研究において重要であり、また、動的で捉えがたいファッションという事象そのものでもある」と、現在本誌の編集に携わる石関亮は述べている(『京都服飾文化研究財団の25年』)。確かに。小雑誌ではあるが、質の高い論考で学際的なファッションを自在にとらえようとする、稀少な国内「ファッション研究誌」であるといえよう。

(古賀令子)



38号(2000春)新版第1号